

## 「群馬音楽センターを愛する会」設立について(3)

水上勝之建築研究室代表 水上勝之

### 「音楽のある街・高崎」と「ここに泉あり精神」

「音楽のある街・高崎」とは、群響を育てた街「ここに泉あり精神」を発信する街が「音楽のある街・高崎」の原点ではないでしょうか。そして群響の活動の拠点として「昭和三十六年ときの高崎市民之を建つ」の碑が象徴する、群馬音楽センターが建設されました。

そこから高崎の特色ある芸術・文化が発信されてきたのではないのでしょうか。

外から有名ミュージシャンや人気バンドを呼んで、演奏会を開くことが「音楽のある街」ではありません。群響創設者の一人丸山勝広氏は「東京にない地方文化を創るのだ!」といって「ここに泉あり精神」を発揮していました。高崎から新しい音楽を発信する、高崎から音楽家・ジュニアオーケストラ・吹奏楽団・若いアーティストが育つ街、それが高崎の「ここに泉あり精神」であり「音楽のある街・高崎」ではないでしょうか。

東京にある芸術ホールのコピーを高崎に持ってくるなら、いつまでたっても世界に誇れる高崎市にはなれないでしょう。高崎は、高崎に蓄積された個性を発信し、東京にはない、高崎ならではの芸術・文化を発信しなければ「輝く高崎」にはなれません。

高崎から世界に発信するシンフォニービルッジと新しい国際交流の展開を考える国際交流会館の創設を、別の機会があれば提案したいと思います。

### なぜ群馬音楽センターが大切なのか？

高崎に蓄積された個性を発信しているのが、群響を育てた「ここに泉あり精神」であり、それを支えた市民活動の高まりによる、期待と夢・さまざまな想いを集めて、市民からの寄付という、日本で初めての重要な意味を持つ「群馬音楽センター」が一九六一年に建設されました。

アコーディオンの蛇腹を想わせる折版構造の「群馬音楽センター」は単純明快であり、リズムカルなデザインは、レーモンドが設計した、日本の代表的なモダニズム建築です。私の師で、レーモンドの弟子である三沢浩氏は「現代日本建築家全集1・

アントニン・レーモンド」の中でこう書<sup>1</sup>いています「日本人の自然に対する敬虔な心の中に、中世の伽藍を建設した人々に同じものを見た筈のレーモンドは、長くその機会が訪れるのを待った、群馬音楽センターの建設は、大げさに言えばそれに近かった。」

高崎市が世界に誇るに相応しい建築といえるでしょう。

「群馬音楽センター」は二〇一一年には開館五十周年を迎えます。高崎に蓄積された芸術・文化の歴史がここにあります。

音楽ホールで最も大切な要素の一つは、蓄積された歴史です。「群馬音楽センター」は建設された経緯だけでなく、開館して以来、世界のオーケストラやミュージシャンの演奏・演劇や多くの文化人等の講演会、また高崎市民の様々な催しの思い出等、数え切れない程のイベントが催された歴史があります。

チェコのスメタナホールやニューヨークのカーネギーホール等、欧米諸国の著名なホールは、その蓄積された伝統あるホールでの演奏が愛されているのです。古い楽屋は機能的には、使いにくいけれど、世界のトップミュージシャンでも廊下で着替え

をしてでも、そのホールで演じる事の出来る喜びのほうが大きいし、観客もその歴史あるホールで鑑賞できる喜びのほうを選択するのです。レーモンドはチェコ出身で、ニューヨークにも縁があります。チェコのスメタナホールとニューヨークのカーネギーホールとの姉妹提携ホールが実現できれば、本当の文化の発信基地になるでしょう。

## 群馬音楽センターは本当に老朽化しているのか？

建築は完成した時から、その建物に適した補修繕計画を立て、的確な補修工事を実施することがその建物を長く維持する基本です。

・その中で設備は、常に新しい技術が開発されていますので、時代に合わせてシステム交換は当然あります。これは老朽化ではなく補修繕計画による工事です。

・また音楽センターでは天井の結露が問題だといいますが、現在は屋根に塗るだけでよい断熱塗装材が開発されていますのでこの塗装工事を実施すれば、室内の結露問題は解決しますし、もちろん空調効果も良くなります。

現在の日本の建築技術は世界の先端を走っていますし、常に新しい技術が開発されています。

・耐震性能については現在の基準で計算しても一・五倍の強度を満たしているようです。

・コンクリートの劣化については、調査結果が公開されていませんが、目視によっても建設当時の技術精度の高さが理解できますので問題ないと予測されます。

・また鉄筋コンクリート構造の寿命は約六十年という記述がありますが、これは固定資産税の減価償却の年数で建築の種類によつて多少違いますが、建築の寿命とは関係ありません。ちなみに平成十年から約五十年（建物の種類により異なる）に改正されました。木造建築の固定資産税の減価償却年数は約二十年（建物の種類により異なる）です。こんな年数で建築寿命が来るなら、世界中の建築が危ないでしょう。

・休憩時間に特に女性用トイレには長蛇の列ができ、開演時間が遅れることも少なくないとの意見があるようですが、それは休憩時間が短すぎるからでしょう。先日の演奏会では、十分でした。やはり少なくとも二十分〜二十五分は欲しいですね。これは

駐車場の利用時間の問題も含めてもう少し時間をゆとりをもてる運用の仕方を考える必要があります

## 音響について

先日池袋芸術劇場で、AYUオーケストラの演奏を聴く機会がありました。珍しく演奏前に司会者による解説がありました。このホールは残響時間が二・二秒と言われていますが、言葉が響き過ぎて聞き取るのに苦労しました。この残響で演奏を聴いても本当の音楽なのか疑問に思いました。二〜三日後に群馬音楽センターで、吹奏楽の演奏を聞きました。やはり演奏前に司会者による解説がありました。聞きやすい音響でした。ちなみに群馬音楽センターは、残響時間一〜二秒だと言われていますが、演奏も大変安心して聞くことが出来ました。

クラシックオーケストラのコンサートの場合、一般的に人の会話がありませんので、気がつきませんでした。司会者の言葉を聞き取るのに苦労するほどの残響時間は、本当に技術の高いオーケストラの演奏でしたら感動するでしょうが、演奏の技術を隠すのにも効果があるように思いました。

一般に音響がよいと言われているホールは、舞台と客席が切り離されていますが、群馬音楽センターの好さは舞台と客席が連続し一体化して、全体が一つの楽器のよう感じられ、演奏者の技術や感性が直接観客に伝わります。

このデザインは世界の多くのホールを見ている音楽関係者から高く評価されています。ホールの個性を生かした利用の仕方があるでしょう。

最近人気の美術館は、建物に合わせた展示活動が人気を集めています。音楽ホールもホールの個性（特性）を生かした演劇・演奏などの利用の仕方を含めたホールの紹介をもっとアピールする必要があります。演者と観客が一体化して楽しめるコーラスやジャズフェスティバル等も最適です。

今まで何度かの改装があつたようですが、その度に音響が悪くなったように思われます。特に座席の改修は必要です。席数は一五〇〇席程度に減らして一席の広さを広げることも可能でしょう。次回の改修の時には、是非元の音響に戻してほしいです。

またシンフォニーホールとたとえば地下で連続させることにより、多くの課題を解

決できるのではないのでしょうか。